

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月27日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530578

研究課題名（和文） 福井県出身者のライフコース展望と地域移動：教育・就業・居住地選択

研究課題名（英文） The Life Course Perspectives and Regional Mobility：How People from Fukui City Chose their Education, Career and Residential Location

研究代表者

石倉 義博（ISHIKURA YOSHIHIRO）

早稲田大学・理工学術院・准教授

研究者番号：60334265

研究成果の概要（和文）：

福井県福井市内の普通高校3校の50年間の卒業生に対し、高校卒業後の進学行動、就業行動および居住地選択を中心に、回顧法によるライフコースに関する質問紙調査を実施した。調査の結果からは、卒業時に他出した者がUターンするタイミングは、進学先の卒業時点が最も多く、他出先での生活基盤が固まる30歳代なかばを過ぎてからのUターンは稀であること、また卒業後の県外への移動の理由が大学等への進学に限定されてきており、県外移動にかかるコストが増大する傾向にあること、また長男が家を継ぐという規範が強く、長男と次三男、また女性では福井県定住率が大きく異なることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

We conducted a questionnaire survey to the graduates of 3 public high schools in Fukui City, who finished those schools during these 50 years. The survey was on their life course, focusing on further education after high school, employment, and residential choice. The survey shows that those who left Fukui prefecture after high school and later U-turned to Fukui prefecture mostly came back to Fukui immediately after graduating from university or college, and that it is rare to U-turn after mid-30s, when their lives outside Fukui tend to be fixed. In the recent years, cost of mobility is increasing, and opportunities of regional mobility tend to be limited to advancement to college. The survey also shows that the rate of those settling down in Fukui prefecture largely differ among eldest sons, younger sons, and daughters, because of the norm of eldest son taking over the family.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：キャリア形成・ライフコース・地域アイデンティティ・地域移動・進路選択

## 1. 研究開始当初の背景

出身自治体や県を越える居住地の変更を伴う移動は、中高等教育修了後の就業地選択、あるいは進学先選択の際に発生すると考えられる。

この時期の地域移動の動向に関する先行研究はいくつか存在するが、同郷者団体など地域移動を行なった者たちの組織に関する研究や、ごく一部の進学校卒業生のみでの調査が多く、選択バイアスが排除しにくく、ライフコース研究としては代表性に問題のあるものであった。

地域移動を、個人の選択に照準して把握するためには、学校歴、職歴、居住歴を含めたライフイベントを変数に含めた、しかも選択バイアスを排除するためには、一定の空間的範囲に存する学校の卒業生を網羅的に捉える調査データの確保が必須であった。

調査グループのメンバーである石倉および西野は、これまでに岩手県内の周辺都市である釜石市の公立高校全4校卒業生を対象とした質問紙によるライフコース調査（以下、釜石調査）を行なった実績があり、その成果との比較を行なうため、地方中核都市出身者のライフコース調査として、通学圏内に高等教育機関が存在する福井県福井市の普通高校卒業生を対象とした研究を企画した。

## 2. 研究の目的

自分がどのような職に就き、どのような人生設計を描くのかという意向・展望と、出身地からの転出やUターン等の地域移動という選択とは、個人の意識の中でどのように構造化されているのか。いわば空間の中での人生設計モデルを探求することが、本研究の全体構想である。

具体的な調査方法としては、福井県福井市という、一定の空間的範囲内の普通高校卒業生を網羅的に捉える質問紙調査を行ない、地方中核都市で育った若者が、高校卒業後に地元に残るのか、県外の大学を卒業した後に地元に戻るのか、どこで家族を形成するのか。このような人生の岐路に影響する社会的諸属性・家族要因・学校要因などを、地域を絞ることにより多くの条件を統制した上で、識別する。

## 3. 研究の方法

(1)ライフコースを構成する行為選択の局面と、ライフコースごとの選択肢の析出、(2)ライフイベント選択における階層的制約、(3)ライフコースイメージの形成・受容過程を明らかにすることをめざし、分析の素材となる質問紙調査を行なった。

調査では、福井市内の普通高校のうち、県外の高難易度大学への進学者の多い進学校、県内大学への進学を主とする普通高校、進路

多様校の計3校を選び、その高校の卒業生に、居住地履歴・職歴・家族歴等の事実項目と、行為選択を取り巻いていた諸条件・選択の主観的な理由づけなどを回顧法により問うた。

標本抽出にあたっては、各高校の同窓会名簿を台帳とし、釜石調査と同様の年齢構成にて抽出を行なった。

なお、同窓会会員の住所党は同窓会の保有する個人情報であり、また調査グループへの情報提供は個人情報の目的外使用にあたるため、標本抽出は同窓会の協力を得たうえで、同窓会の名簿管理業者が、研究グループの指示のもとに行なった。その上で、同窓会名にて、抽出された会員に対して個人情報の目的外使用に関する同意の取り付けを往復郵便により行ない、目的外使用を認めなかった会員は、標本から除外した。

個人情報の使用について同意を得られた対象に対しては、郵便により調査票を送付し、回収も郵便にて行なった。その際、個人情報の流出を防ぐため、調査グループは標本の名簿情報を直接操作せず、各同窓会の名簿管理業者に委託して発送作業を行なった。

調査対象の居住地は全国に分散しているため、調査の実施方法としては郵送法を採用したが、それによる回収率の低下を防ぐため、調査票に同窓会による依頼状に加え、地方紙に掲載された調査プロジェクトの紹介記事を新聞社の許可を得て同封し、また、返送期限までに礼状を送付することによって、回答への動機づけを高める工夫を行なった。

回収できた記入済調査票は1093票であり、調査票発送数(3603)を母数とした回収率は30.5%であった。

## 4. 研究成果

3. で述べた調査からは以下の知見が得られた。

### (1) 地域移動の時期・ルートの固定化

地域移動は人生の一時期に限られており、県外の他出時期は高校卒業時が最も多い。また、Uターンは22~23歳という進学先の卒業時期に最も多く、この時期を過ぎると、Uターン行動は激減し、30代半ばをすぎて県外に生活基盤(住居・家族・地位)ができると、移動は起きにくくなるという、釜石調査でも確認された傾向が、共通に見いだされた。

また、晩婚化に伴い、Uターン可能な時期も延長傾向にあることも合わせて確認された。

### (2) 福井を出るルートが進学に一本化

男性では、1935~54年生まれコーホート(図1の模式図)に比して、1955~74年生まれコーホート(図2の模式図)では、高卒時に県外就職するルートが縮小し、県外移動の

ルートが上位の教育機関への進学に限定されるようになってきている。これは、高卒就職者が他出せずとも、安定して県内で就職先を見つけられる状況にあることを示しているが、一方で、学費のかからない低コストの地域移動が閉ざされていっているともいえる。

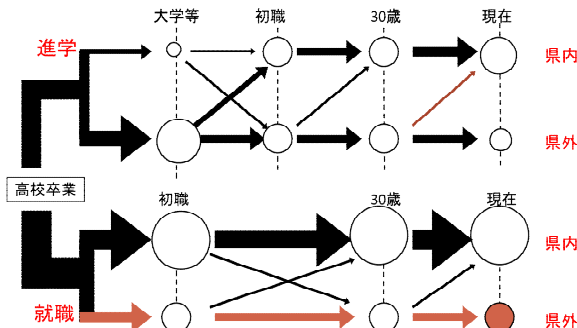


図1 1935-1954年生まれ男性の地域移動

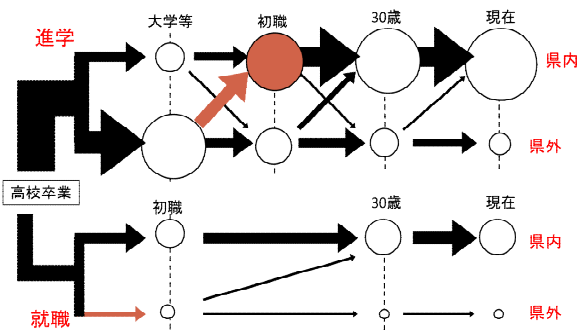


図2 1955-1974年生まれ男性の地域移動

### (3) 長男が家を継ぐモデルの根強さ

きょうだい順序は地域移動に大きく影響しており、長男は他出しても大半がUターンするのに対し、次三男は大半が他出し、また戻って来にくい。女性は、多くが地元に残るが、一度他出した場合はUターンしにくい傾向がみられた。女性であっても、男性のきょうだいがいない場合は、長男に近い移動パターンを取ることもわかった。

Uターンした理由も、長男は「もともと戻るつもりだった」が過半数を占めるのに対し、次三男は3割以下にとどまる。また、高校入学時点で考えていた将来の居住地イメージでは、「県外定住」の回答が次三男では長男、女子の2倍以上あり、「家を継ぐ」必要の有無が、比較的是やい段階で、将来展望に影響していることがうかがえる。

なお、これらのきょうだい順序および性別による移動傾向の差異は縮小傾向にあり、若い世代（1955-1974年生まれ）では、長男が家を継ぐという規範は強いものの、次三男のUターン率も上がっており、地元に住定する傾向が強まっている。女性の場合は、他出傾向が低下し、他出後のUターン傾向も高まっていることが明らかとなった。

(4) はやい段階で人生の展望が立てやすい状況

調査回答者の8割以上が、高校に入学した時点で、将来どこに住むかについて、なんらかのイメージを持っていたと回答している。また、県内進学者、県内就職者には、進路決定の際に「親の希望」を考慮したという回答が多い。反対に、県外進学者および県外就職者は、進路決定の際に考慮した要素を「何もない」と回答する傾向も発見された。

福井市内出身者は、比較的是やい時期に、将来の展望が出来上がっており、実際に将来イメージどおりの移動を行なうケースが多く、強固なトラックが形成され、しかも当事者に共有されていることがうかがわれる。

特に、福井県は「教育県」、「人材輩出県」という自己規定を強く持っており、「勉強をがんばれば、よい学校に進め、よい職業・地位に就くことができる」モデル、教育を通じて地位達成を果たすモデルが、当事者にとって見えやすい状況にあるといえる。

しかし、トラックの分岐時期の早さと強固さは、「福井に残りたい」のに進学ルートに乗って県外に押し出されてしまった者、Uターンしやすい時期を逃した「帰りたい」者にとっては、トラックの乗替えが困難で、希望と実際の選択にミスマッチが起きた場合の修正が、本人の希望どおりにはなされない危険がある。

調査では、県外在住の30代男性の4割が「福井に戻りたい気持ちがある」と回答しているが、前述のように、この時期はUターンが起きにくい段階に入っており、実際にその希望が叶えられる可能性は少ないと予想される。Uターンを促進したい立場の者からすれば、これは大きな機会損失といえるだろう。

また、「県外進学-卒業時Uターン」というルートの固定化、すなわち進学者を県外に送り出し、県内に確保されている大卒者の就職の範囲内で、進学先の卒業時に福井に呼び戻す(Uターンさせる)モデルへの一元化は、県内労働市場の緩衝機能を、県外進学者に担わせている状況だともいえる。

しかし、進学先卒業時に県内労働市場がどうなっているか不確定の状態、県外に出なくてはならない状況は、当事者が実際にUターンの可能性を考慮する段階で、「(戻りたいけれど)福井には仕事がない」という不満を生みやすい。

また、福井県内の産業構造は長期にわたり変化しておらず、また県内労働市場は1995年の約45万人から、2010年時点では約40万人へと減少傾向にある。そのような状況下で、県外進学者を県内労働市場の緩衝材とし続けることは、県内の産業構造の一層の硬直化

を促す可能性もある。この個々人のライフコースとマクロな就業・産業構造の関係については、今後より一層の研究が必要である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

西野淑美 「文脈の中の地域移動：福井市内高校卒業生の将来イメージと実際の移動から」『東洋大学社会学部紀要』50(1), 67-82, 2012. (査読無)

平井太郎 「戦後日本における住むことの社会学探究の可能性」『社会科学年報』46, 85-104, 2012. (査読有)

[図書] (計 1 件)

西野淑美 (東洋大学福祉社会開発研究センター (編)) 『地域におけるつながり・見守りのかたち 福祉社会の形成に向けて』中央法規出版, 362, 2011. («出身地域とのつながりの変化と生成」 pp.91-111 を担当)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

石倉 義博 (ISHIKURA Yoshihiro)  
早稲田大学・理工学術院・准教授  
研究者番号：60334265

##### (2) 研究分担者

西野 淑美 (NISHINO Yoshimi)  
東洋大学・社会学部・講師  
研究者番号：30386304

西村 幸満 (NISHIMURA Yukimitsu)  
国立社会保障・人口問題研究所・社会保障  
応用分析研究部・第二室長  
研究者番号：80334267

元森 絵里子 (MOTOMORI Eriko)  
明治学院大学・社会学部・准教授  
研究者番号：60549137

平井 太郎 (HIRAI Taro)  
弘前大学・大学院地域社会研究科・准教授  
研究者番号：70573559